

RETAILER ACADEMY NEWS

May 2023 | Bentley Motors Japan



マリナーが新作を続々と発表 GTデビュー20周年やル・マンの勝利を記念した特別仕様車

ベントレー モーターズはこのほど、ビスポーク部門のマリナーが手掛けた特別仕様車の新作を発表しました。
いずれもマリナーの技術の高さを示すショーケースとなっており、大きな注目を集めています。

GTデビュー20周年の記念車

1台目は、コンチネンタルGTのデビュー20周年を記念した特別仕様車で、上海モーターショーで初めてお披露目されました。ベース車両はコンチネンタルGT Sで、ボディカラーはダークグレイメタリックのマグネティック。ブラッククロームのディテールとブラックペイント仕上げの22インチ10スポークスポーツホイール、レッドブレーキキャリパー、そしてカーボンファイバーのボディキットに施されたレッドのストライプが、このボディカラーを一層引き立てています。



ブラック&レッドのテーマはインテリアにも用いられており、レザーカラーはベルーガ&ホットスパーのデュオトーンで仕上げられています。フェイス&ウェストレールパネルは、上部がグラナイトストーンヴェニア、下部がグランドブラックのデュアルヴェニアで、中央にはレッドのピストライプが施されています。助手席側のパネルとセンターコンソールには、初代GTと3代目GTのシルエットがレーザーエッチングによるオーバーレイで描かれています。さらにトレッドプレートには、初代GTと3代目GTのホイールのシルエットも刻印され、GTのデビュー20周年を祝福しています。



ル・マンの勝利から20周年を記念

もう1台は、ベントレーがル・マン24時間レースで6度目の優勝を飾ってから20周年、そしてル・マン初開催から100周年を記念してマリナーが製造したコンチネンタルGTとコンチネンタルGTCをベースに製造するル・マンコレクションです。モチーフとなったのは、2003年の優勝車Speed 8の7号車。ボディカラーは、現代版ブリティッシュレーシンググリーンともいえるヴァーダントで、ボンネット（GTはルーフにも）にムーンビームのレーシングストライプが施されています。Speed 8のグリーン&ブラックにちなみ、ブラックライン スペシフィケーションが採用され、随所にムーンビームのストライプが用いられています。また、マトリックスグリルにはホワイトで「7」を描き、優勝車のナンバーを1924年～1930年に5回優勝したレースカーのラジエーターペイントを再現しています。



インテリアは、ベルーガのモノトーンを基調としていますが、シートにはレースカーを連想させる素材としてDinamicaを採用。コントラストステッチとシートベルト、ステアリングの6時の位置にはホットスパーを用いて、車内のアクセントとしています。フェイスパネルはカーボンファイバーで、助手席側のパネルには6回の優勝年を示すリースのモチーフが描かれています。



COMPETITOR INFORMATION



V12 + PHEVの新世代スーパースポーツ ランボルギーニ・レヴェルト

ランボルギーニは、2023年3月29日に同社のスーパースポーツモデル「アヴェンタドール」の後継モデルとなる「レヴェルト」を発表。
新世代のフラッグシップにふさわしい同社初のプラグインハイブリッドモデルとなります。

SUMMARY

- ランボルギーニ史上最強の1015psを発揮する同社初のプラグインハイブリッドモデル
- パワートレインは自然吸気 V12 エンジンと3つの電気モーターとの組み合わせ
- エンジンの前にトランスミッションを配置するカウンタック以来のレイアウトを廃止することで居住空間を拡大
- カーボンファイバー・モノコックのコンセプトをフロントエンドまで拡張した「monofuselage」を採用
- 13種類のドライブモードに加えてEVモードによる全輪駆動での走行も可能



INTERIOR

- 前モデルに比べて頭上空間は26mm、足元空間は84mm拡大。座席の後方には新たにゴルフバッグなどを収納できるスペースを確保
- 「Feel Like a Pilot」をコンセプトとした新世代にふさわしいダイナミックなインテリアデザインを採用
- 12.3インチのメーターディスプレイ、縦長の8.4インチ中央ディスプレイ、9.1インチの助手席ディスプレイによる新しいインターフェイス
- 車両ダイナミクスとマルチメディア操作が手の届く範囲で快適に行える、新しいステアリングデザインを採用
- 新設計のナビゲーションシステムは、オンラインにより交通情報、天気などの情報をリアルタイムに更新。駐車場および充電スタンドの満空情報なども提供



EXTERIOR

- ディメンションは全長4,947x全幅2,033x全高1,160mm、ホイールベースは2,779mm
- 前モデルのアヴェンタドールSに比べて全長は150mm、全幅は3mm、全高は24mm拡大。ホイールベースは79mm延長
- ダウンフォースやドラッグをはじめとするエアロダイナミクスを全面的に改善。スタイリングはランボルギーニの社内デザイン
- デイタイムランニングライトとテールライト、ボディサイドのエアインテークにY字型のシグネチャーを反映
- エンジンのヘッドカバーを露出させたデザインにより、V12エンジンの存在感をアピール



TECHNOLOGY

- 新設計の6.5L V12自然吸気エンジンは最高出力825ps、最大トルク725Nmを発揮。モーターを含めたシステム合計出力は1,015ps
- 最高出力110kWの電気モーターをフロントに2基、リアに1基搭載。リチウムイオンバッテリーはセンタートンネルに配置。後退時はモーター駆動となり、EVモードでの走行も可能
- 13種類のドライビングモードを設定。最高出力1,015psは「コルサ」+「パフォーマンス」の組み合わせで発揮。0-100km/h加速は2.5秒、最高速度は350km/h以上
- エンジンの搭載方向を180°変更し、エンジンの後ろに横置きトランスミッションを配置するレイアウトを採用。トランスミッションは新開発の8速DCT
- 新開発のカーボンモノコックは前モデルに比べて10%の軽量化と25%のねじり剛性アップを実現。フロントフレームもカーボン製を採用



BRAND STORY

Lamborghini Super Sports



革新的な設計でランボルギーニの名を広めたランボルギーニ・ミウラ

ランボルギーニ・フラッグシップモデルの歴史

ランボルギーニの新たな頂点として登場したレヴェルト。その系譜は同社初のミッドシップモデル「ミウラ」まで遡ります。革新的な設計で世界を驚かせた同社スーパースポーツモデルの歴史を振り返ります。

世界を驚愕させたスーパーカーの原点

2023年で創業60周年を迎えるランボルギーニ。その歴史の立役者が1966年に発表された「ミウラ」です。巨大な4.0L V12 DOHCエンジンをミッドシップに横向きに搭載するという前代未聞のレイアウトを採用し、トランスミッションとデフは一体成形という意欲的な設計でした。ミッドシップのスポーツカー自体がほとんどない時代に登場した「ミウラ」は、レーシングカーのような常識外れのスペックとカロツェリア・ベルトーネによる流麗なボディで、ランボルギーニの名を一躍世界に広めることに成功しました。

シザードアの採用

V12エンジンをミッドシップに横置きした「ミウラ」には難点が多かったため、1971年に発表された「カウンタック」ではエンジンを縦向きに変更。ただ、通常の配置ではホイールベースが長くなるため、エンジンとトランスミッションを通常とは前後逆に搭載し、デフをエンジンの後方に配置する革新的な設計が行われました。極限まで突き詰めたパッケージングのため通常の前ヒンジのドアが付けられず、上方に開くシザードアを採用。このスタイリングは大きな話題となり、現在まで続く同社のアイコンとなったのは周知の通り。その後も改良を

繰り返し、1990年まで生産される長寿モデルとなりました。



スーパーカーの代名詞的存在となったランボルギーニ・カウンタック

フルタイム4WDの採用

1990年に登場した「ディアブロ」は「カウンタック」の正常進化モデルです。基本骨格はカウンタックと同じ鋼管スペースフレームで、5.7L V12エンジンは最高出力492psを発揮。最高速度は325km/hと発表されました。最大のトピックはフルタイム4WDの設定。スタイリングは「ミウラ」「カウンタック」をデザインしたマルチェロ・ガンディーニによるもので、新たにロードスターも追加されました。



初めて4WDを採用したランボルギーニ・ディアブロ

新たにアウディ傘下で開発

1999年にアウディ傘下となったランボルギーニ。その新体制で開発された初のフラッグシップモデルが、2001年に発表された「ムルシエラゴ」です。伝統のV12エンジンは排気量を6.2Lに拡大。冷却水温や外気温に応じて左右のエアインテークが自動的に展開する可変エアフロー冷却システムや可変式リアスポイラーなどの新機構を採用しています。骨格は鋼管スペースフレームにカーボンファイバー製パネルによる補強を加えたもので、ボディパネルはルーフとドアを除くすべてがカーボンファイバー製となりました。



新技術が積極的に投入されたランボルギーニ・ムルシエラゴ

すべてが新設計となったフラッグシップ

2011年に登場した「アヴェンタドール」は、連続と受け継がれてきた伝統的な車体構造を一新したモデル。エンジンとトランスミッションを前後逆に搭載するレイアウトは踏襲されたものの、旧式な鋼管スペースフレームは現代的なカーボンファイバー製モノコックに変更。エンジンは新設計の6.5L V12で、トランスミッションは7速セミATに統一。4WDシステムは電子制御式に進化しました。

ランボルギーニのスーパースポーツモデルは、常に驚きと革新をもたらす存在です。新たに登場した「レヴェルト」では、自然吸気のV12エンジンへのこだわりとPHEVへの進化により、エモーショナルな走りと効率性の両立を図っています。



車体構造を一新したランボルギーニ・アヴェンタドール LP700-4

SALES

2023年第1四半期も好調な業績を維持
営業利益は前年同期比27%増

ベントレー モーターズはこのほど、2023年第1四半期の決算を発表し、販売台数は前年同期比10%増の3,517台、売上高は9%増の8億8,200万ユーロ、営業利益は27%増の2億1,600万ユーロと、好調な業績を達成しました。第1四半期としては、売上高は過去最高、営業利益は2022年度に次ぐ2番目に高い水準となり、売上高利益率も20.9%から24.4%に上昇しました。この好調な業績の背景には、各モデルでマリナーのコーチビルドや限定車に代表される、カスタマイズへの高い要望にお応えしたこと、ワンランク上のデリバ

ティブやワンランク上のオプションをお選びいただいたことなどがあります。

地域別の販売台数は、アメリカが39%増の1,157台で第1四半期としての過去最高を記録したほか、アジア太平洋（11%増・410台）と中東（66%増・278台）での好調が目立ち、全世界の販売台数の増加に貢献しました。

エイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「厳しい世界情勢にもかかわらず、2023年も売上高、営業利益、売上高利益率におい

て成長することができ、素晴らしいスタートを切ることができました。アメリカでの記録的な業績は注目に値するもので、ベントレーの3台に1台がこの地域で販売されたこととなります。ペンテガEWBの導入やフライングスパーの成功がこの成長の鍵となったと考えています。今後は、ベントレーのバランスのとれたモデルラインアップが好調を後押しすると見られますが、市場には依然としてグローバルな課題が残っているので、慎重に判断していきます」などとコメントしています。

■ 2023年第1四半期 地域別販売台数

市場	2023年第1四半期 (前年同期比)	2022年第1四半期	市場別シェア
アメリカ	1,157 (39%増)	832	33%
中国本土、香港、マカオ	666 (12%減)	761	19%
欧州	645 (9%減)	706	18%
アジア太平洋	410 (11%増)	369	12%
英国	361 (2%減)	368	10%
中東	278 (66%増)	167	8%
合計	3,517 (10%増)	3,203	



GT/GTC、フライングスパー 24MYの特徴 新モチーフなどでデリバティブを明確化

ベントレー モーターズはこのほど、24MYのコンチネンタルGT/GTC、フライングスパーを発表しました。特にコンチネンタルGT Azureと、フライングスパー SpeedおよびSで大きな変更があります。お客様に24MYの魅力を正確にお伝えできるよう、理解を深めるうえでの参考にしてください。

コンチネンタルGT Azureの主な変更点



新デザインのキルティング

シート、ドア インサートに新デザインの「オーガニック コンフォート キルト」をAzureのみの標準装備として採用。落ち着いたオーガニックな雰囲気のエレガントなデザインで、ウェルビーイング重視のデリバティブであることを明確に表現しています。

標準ホイールの変更

フライングスパーに設定されていたデザインの22インチ10スポークホイール（ブラックペイント&切削光輝仕上げ）をGT/GTCに初採用し、Azureの標準ホイールに設定。



パーティカルヴェーン グリルの採用

ベントイガEWBとフライングスパーに採用されていたパーティカルヴェーン グリルをGT/GTCではAzureモデルのみに採用。クロームのパーティカルヴェーンの奥にグロスブラックのマトリックスグリルを配した二重構造で、エレガントさを高めています。

フライングスパーの主な変更点



SpeedおよびSのシートに新デザインのキルティング

フライングスパーでSpeed（標準装備）とS（オプション）のみに設定される新デザインの「プレジジョン ダイヤモンド キルト」は、インテリアをパフォーマンス志向の雰囲気に一新します。ドア インサートは、23MYまでの3D ダイヤモンドレザーを継続して採用します。

Speedにダークティントのブライトウェアを採用

バッジ類を除くエクステリアのブライトウェアは、グラナイトでペイントしたダークティント仕上げが標準仕様となります。Speedモデルの外観を一新し、より押し出しが強く、スポーティなポジショニングとキャラクターを強調しています。オプションでブラックライン スペシフィケーションを選択することも可能です。



マトリックスグリルを採用

SpeedとSでパーティカルヴェーン グリルに代えてマトリックスグリルを採用。Speedはダークティント、Sはサラウンドとグリルともにグロスブラック。SpeedとSのスポーティなキャラクターを際立たせ、ファンドライブ重視のデリバティブであることを明確に表現しています。（ベースモデルは、グロスブラックのマトリックスグリル&クロームのサラウンドに変更されます）

各モデル共通の変更点

- ボディカラーの新色（オプションカラー）に「トパーズブルー」を追加
- インテリアのパネルに、ダイヤモンド ブラッシュド アルミニウム（ダークティント）とエンジンターンド アルミニウム（ダークティント）を追加
- ウッドパネル「タモアッシュ」を廃止
- ベースモデルとAzureでオールシーズンタイヤを標準装備、最高速度を270km/hに設定、ESCのDynamicモードを廃止
- キャビンのカーペットに再生ナイロン糸「ECONYL®」を、ディープパイル オーバーマットに100%ピュアウールを採用

SHOWROOM

ベントレー東京が芝に東日本最大の ショールームをリニューアルオープン



ベントレー東京はこのほど、ショールームを東京都港区芝に移転し、リニューアルオープンしました。このショールームはコーンズモーターズ株式会社の運営で、コーンズ・アンド・カンパニー・リミテッドが新設した新本社ビル内に開設。首都高速道路の出入口に近く、芝公園の南側に位置する好立地で、首都高速道路を走行するドライバーに向けて車両を展示する「ショーケース」を初めて設置しました。

また、この新施設は最新のCIを反映しており、3フロアにわたる計623.5㎡の展示空間に、新車および認定中古車を最大8台展示可能な、東日本最大級のショールームとなりました。4月22・23日にはグランドオープニングイベントを開催し、多くの方に新施設をご覧いただきました。

ベントレー モーターズ ジャパン ブランドダイレクターの牛尾裕幸は、「東京はベントレー モーターズ ジャパンのシェアの半分近くを販売する非常に重要なマーケットです。これまでの長い信頼関係に基づき、その重要性をご理解いただき、コーンズモーターズ株式会社がこれまで以上に積極的にベントレーのビジネスに関わっていただけることを感謝しています」などとコメントしています。

ベントレー東京 芝ショールーム

〒105-0014 東京都港区芝3-3-10
03-6435-2750

定休日： 水曜、年末年始

営業時間：10～19時（月～金）、
10～18時（土日・祝）

CRAFTSMANSHIP

チャールズ国王の戴冠式を記念し キャビンクッションを製造



ベントレー モーターズはこのほど、チャールズ3世国王陛下とカミラ女王陛下の戴冠式を記念し、熟練の職人チームが協力し、ベントレーの車内で使用できる特注のキャビンクッションを限定製造しました。クルー本社工場に拠点を置くこのチームは、優れたクラフトマンシップと最先端技術を組み合わせることで、戴冠式のエンブレムをデジタル化し、最終的には手作業でそれぞれのクッションを製作しました。

このクッションの製造にあたっては、特に約30,000ステッチで作られるエンブレム部分の刺繍は、ベントレーの厳しい品質基準をクリアするため、丸3日かけて4回の刺繍加工が必要だったため、慎重に改良が重ねられました。ベントレーのインテリアに合うよう特別に選ばれたレザーに合わせ、3種類のカラーバリエーションのエンブレムがそれぞれ2色の糸で刺繍されています。

レザーは北欧の温暖な地域にある有刺鉄線のフェンスがない環境で育った皮革を使用。それぞれのレザーは職人が手と目で確認し、印を付けてから精密にカットされます。縫製、整形、仕上げはすべて手作業で行われ、1つあたり約3時間以上をかけて完成させたクッションは、ベントレーのインテリアにひけをとらないクオリティで仕上げられます。

このクッションはベントレーのプレスカーで使用されるため、お客様に販売する予定はありませんが、ベントレーの職人の技術の高さを広く知ってもらう役割を担います。

BEYOND 100

米国のディーラー全店舗で カーボンニュートラル認証を取得



ベントレーの米国のディーラーが、カーボントラスト社のPAS 2060 認証を取得し、全59店舗でカーボンニュートラルを達成しました。

これらの59拠点は、12カ月間にわたってカーボントラスト社と緊密に連携し、カーボンニュートラル認証の取得に向けて準備を進めてきました。これは、カーボンフットプリントを測定し、CO2削減計画を策定・実行し、それでも残る排出量をカーボンオフセットで相殺するというものです。当初は植林などによるカーボンオフセットで認証取得に備えていましたが、現在では各ディーラーのスタッフ用車両をBEVやPHEVに切り替えたり、グリーンエネルギーに切り替えたり、使い捨てプラスチックをなくしたり、さまざまな行動によるCO2削減のステップを実行しています。

ベントレー モーターズは2030年までにエンドツーエンドでのカーボンニュートラル達成を目指していますが、今回の米国でのカーボンニュートラル認証取得により、この目標達成にまた1歩近づくことになりました。ベントレー アメリカのクリストフ・ジョージ社長兼CEOは、「今回の達成は、カーボンニュートラルの未来への貢献を反映したものであり、真にサステナブルなラグジュアリーを提供するというベントレーの旅における重要な一歩です。ディーラーネットワークがカーボンニュートラルに注目し、電動化に向けたベントレーの旅に参加してくれたことを誇りに思います」などとコメントしています。

日本の販売店の皆様にもカーボンニュートラルに向けた取り組みを行うようお願いしてきましたが、引き続きカーボンニュートラル達成に向けてご協力ください。

COLLABORATION

ベントレーがグッドウッドで開催される 犬の祭典で特別な自動車パートナーに



ベントレー モーターズは、5月20～21日に英国グッドウッドで開催された犬のための祭典「グッドウーフフェスティバル（Goodwoof Festival）」で、特別な自動車パートナーとして参加しました。犬とその友人たちに素晴らしい週末（または素晴らしいご飯）を提供するためのさまざまなアクティビティに、ベンティガが一役買いました。

ウェスト サセックスにあるグッドウッドの中心にあるクラブハウス「ザ・ケネルズ」の芝生で行われたこのイベントでは、世界レベルの競技、フィールド&トレイルでのデモンストレーション、犬の専門家や著名なドッグオーナーによる講演など、犬も人も楽しめる催しが行われました。

今年は新たに「ベントレー パーキング パドック」を設置。このパドックは、ベントレーのドライバーもしくは犬の名前が「ベントレー」である場合は、専用駐車場からザ・ケネルズへ素早くアクセスできるサービスを提供しました。

また、ベンティガが羊飼いをサポートする牧羊犬のための特別なアクティビティも実施。さらにイベント主催者であるチャリティ団体「ペット アズ セラピー」を支援するため、ベンティガ EWBでの体験を提供しました。このベンティガ EWBでは、乗り込んだ人全員（特に犬のお客様）がVIP待遇を受けることができ、インフルエンサーのような写真を撮りたい犬のために、車両の前には毛並みに風をあてるための送風機も用意しました。

カーエアコンの基礎知識

クルマに欠かせない装備となるのが「カーエアコン」です。今回は、その仕組みと、構成する部品のそれぞれの働きなどを説明します。
また、熱源を持たないEVに採用されるエアコンの仕組みもあわせて紹介します。



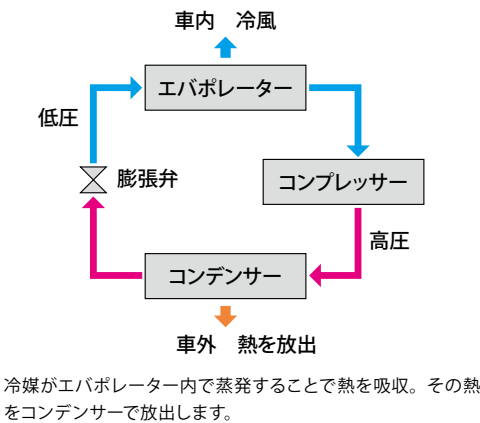
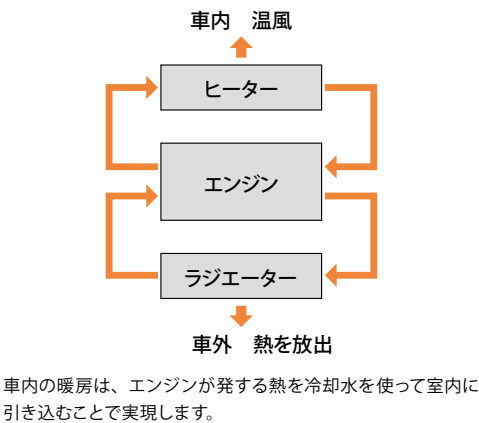
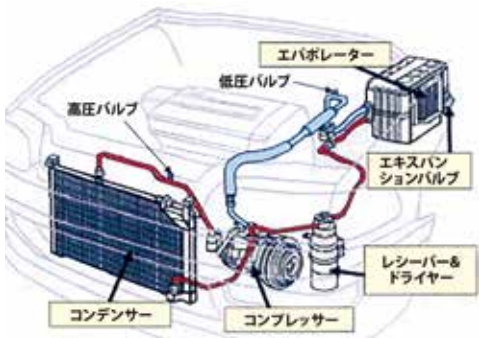
エアコンが働く仕組み

クルマのエアコンは冷房と暖房という二つの機能を備えています。暖房は、エンジンで温められた冷却水の熱を車内に送り込むのが基本的な仕組みとなります。同じ冷却水は、クルマの前部に備えられた熱交換器のラジエーターで冷やされ、エンジン本体を冷やします。

冷房は、液体が気体になるときに周囲の熱を奪うという自然現象を利用します。具体的には、カーエアコン用の冷媒「HFC-134a」が、車内にあるエバポレーター（蒸発器）の中で液体から気体に蒸発することで周囲の熱を吸収。その冷気を室内に導くのが冷房です。

蒸発した冷媒は、その後、コンプレッサーで圧縮され、高温・高圧となります。それがクルマの前部に設置されたコンデンサー（凝縮器）で、外気温によって冷やされて凝縮され、冷媒は気体から液体にと変わります。その高圧な液体の冷媒を膨張弁（エキスパンションバルブ）で減圧。その先のエバポレーター（蒸発器）で、低圧になった冷媒が液体から気体に蒸発することで、周囲の熱を奪います。

エバポレーター（蒸発器）で吸熱したエネルギーと、コンプレッサーで加えた仕事量を加えたエネルギーが、コンデンサーで放熱されます。



各部品の果たす役割

<h3>コンプレッサー</h3> <p>低圧・気体の冷媒を圧縮します。主にエンジンの力をベルトで配分して駆動します。</p>	<h3>膨張弁（エキスパンションバルブ）</h3> <p>高圧・液体の冷媒を小さな穴から噴出することで減圧・膨張させて、冷媒を霧状にします。</p>	<h3>レシーバー</h3> <p>液化した冷媒を蓄えます。循環する冷媒の量を一定化し、含まれる空気と水を分離します。</p>	<h3>コンデンサー／エバポレーター（熱交換器）</h3> <p>高温の冷媒を冷却して液化させるコンデンサー。冷媒を気化させるのがエバポレーター。</p>
--	--	---	---

主な冷媒の種類

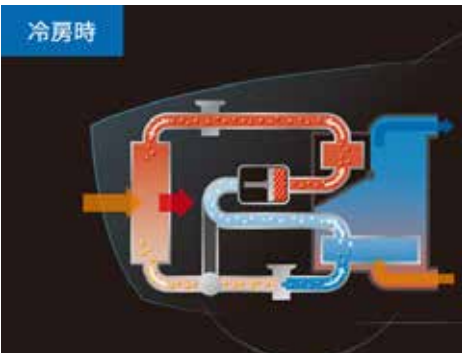
エアコンに使われる冷媒は様々な種類があります。現在は、主な冷媒として建物用のルームエアコンにはHFC-32(R-32)が使われています。また、クルマ用や冷蔵庫などにはHFC-134aと呼ばれる冷媒が使用されます。過去にHCFC-22、CFC-12という冷媒が使われていましたが、オゾン層を破壊するということで、現在は生産が終了となっています。

■ 主な冷媒の特性

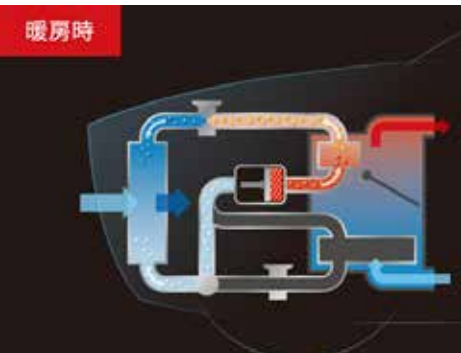
冷媒名	沸点	特性
HCFC-22	-40.75	過去のルームクーラー用。ゴムを劣化させる。
HFC-32 (R32)	-51.7	現在のルームクーラー用。若干の微燃性。
CFC-12	-29.65	過去のカーエアコン用。オゾン層を破壊する。
HFC-134a	-26.07	現在のカーエアコン用。

熱源のないEV用のエアコン

EVには熱源となるエンジンがありません。そこで暖房用に電気で発熱するPTCヒーターが使われています。また、家庭用にも使われるヒートポンプ式のエアコンも採用が広がっています。ヒートポンプは、カーエアコンの冷房と逆の方法で、車外の熱を吸収して、車内に熱を供給します。ヒートポンプ式であれば、冷房と暖房の両方を一つのシステムで賄えます。



ヒートポンプを冷房で使うときは、室内側のエバポレーターで冷媒を気化させます。



ヒートポンプで暖房するときは、冷房の回路を変更して、車内側のコンデンサーを使います。